
人形好き

こーく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形好き

【NZコード】

N3207C

【作者名】

一へく

【あらすじ】

私は座っていた。雛人形を見上げていた。私が好きな眺め。すると…人形の細い目、小さい目玉が動いた

私は座っていた。雛人形を見上げていた。私が好きな眺め。

「！」人形の細い目、小さい目玉が動いた。

私を見つめる10体の人形たち。

ただ、私を見つめる人形たち。

その情景だけ忘れない。確かに私を見つめていたのだから。

それ以来、毎年、私は雛人形を飾っていた。目だけが動いた雛人形を。

怖くてもいい。なぜだか、もう一度だけでもいいから動くのが見たかった。

しかし動くことは無かつた。

「お母さん。人形が私を睨むの」と怯えた我が子の言葉を聞き、しうがなく雛人形を処分することになった。

夫、娘には内緒でお雛様だけ、私は捨てずに隠し持つていた。

雛人形を処分した翌年。3月3日。

娘は雛人形を怖がり「もう見たくない」と言い、新しい雛人形を購入することは無かつた。

三日の深夜。

娘の悲鳴が私と夫を目覚めさせた。

娘の部屋に駆け込む。

娘は布団を頭からかぶり怯えていた。

「どうしたの？」

「て、天井に」

天井？と思いつつ夫が見上げたのだろう。

「うわ！」夫の声。

私も天井を見てみる。

そこには人形達がいた。天井からぶら下がっているような。袖を垂らしているお内裏様、三人管女、五人囃子。人形達は私を見つめる。

処分したはずの人形達。絶対にそうだ。

私は夫と娘をその場に置き去りにし、寝室に戻った。なにも焦ることはない。私の心は冷静だった。

押入れの中から綺麗に包んでいた箱をだし、中からお雛様をだした。

お雛様をつかんだとき、お雛様の手が私の指を握った。私は握られたことなど気にもとめず、娘の部屋に戻った。天井を見上げた。

そこに、人形はいなかつた。

お雛様も、いつの間にかいなくなっていた。

「お母さん」と娘が言い、抱きついてきた。

「なんだつたんだろう？」と夫が言った。

「さあ？」本当に分からない。

ただ見つめる人形達がいるということだけ、動く人形が存在するということを知らされる出来事だった。

私の家では人形を置くことがなくなつた。小さなぬいぐるみさえも。

夫も娘も人形が嫌いになつた。

私は一人に内緒でお雛様とお内裏様だけの雑人形を隠し持つていた。

二人だけの人形が動くことは一度も無かつた。

動いても動かなくてもどちらにしても私は持ち続けるだろう。

だって、なんだか、持つていたいって思うのだから、しょうがないでしょ。好きなんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3207c/>

人形好き

2010年10月17日02時37分発行